

# 韓国における家庭科教育の改革について

——第五次教育課程から第六次教育課程へ——

長 石 啓 子・中 村 泰 彦・田 島 真理子・池 山 和 子

(1995年10月16日 受理)

A Study on the Reforming Home Economics Education in South Korea

Keiko NAGAISHI, Kazuko IKEYAMA, Mariko TAJIMA, Yasuhiko NAKAMURA

## 1. はじめに

平成の教育改革では、国際化に対応する教育の在り方が求められている。家庭科における国際化の対応としては、異文化における家族や生活について理解し、そこから学ぶとともに、国際社会で役立つ方向をめざすことではないかと考えられる。他国の家族と子どもの社会化の現状について理解し、教育内容に盛りこんでいくことが必要である<sup>1)</sup>。そのための方法として、諸外国の教育改革に学ぶことが挙げられる。

韓国では、日本の『学習指導要領』にあたる第六次新『教育課程』(1992年)によって、初等教育を行う国民学校、中等教育を行う中学校と高等学校にわたる教育課程が全面改訂されることになり、本年度(1995)から小学校は1・2年生に、中・高等学校は1年生に実施されている。家庭科教育に関わる教科も、①初等・中等教育を一貫する普通教育として再編・統合する、②男女共学を徹底させるなどの点から抜本的な改善措置がとられた<sup>2)</sup>。

そこで本論では、平成4年度に小学校から始まって5年度中学校、6年度高等学校の順に新指導要領による教育が実施されている日本の家庭科教育における今後の方向性を探ることを目的として、第五次教育課程(以下従来のまたは旧教育課程とも言う)から第六次教育課程(以下新教育課程とも言う)への変化を検討し、韓国家庭科教育の改革について考察する。

## 2. 方 法

第五次教育課程で改訂された点を韓国語で書かれている第六次教育課程<sup>3)</sup>の中から抽出して日本語に訳し、新教育課程への移行の方法および小学校、中学校、高等学校の別に、教科目標、内容履

修方法、履修時間数等について第五次教育課程<sup>4)</sup>と比較・検討して、韓国家庭科教育の改革について考察する。

### 3. 結果および考察

#### 3・1 新教育課程への移行の方法

新教育課程は、初年度(1995)には小学校の1・2年生に、中・高等学校の1年生に実施され、2年目(1996)には小学校3・4年生、中・高等学校2年生に、3年目(1997)には小学校5・6年生、中・高等学校3年生に実施されて完了する。

#### 3・2 小学校(国民学校)の「実科」

従来は、第4学年以上におかれている9教科の一つで週2時間の授業時数であったが、改訂では、第3～6学年に設置されており、授業時数は週1時間である。新・旧教育課程における教科目標および内容は表1、表2に示す。新教育課程では、第一に教科の性格を挙げ、実践的な側面を強調して「取扱い」「つくる」「栽培及び飼育」「管理」の4領域で構成されていることを述べている。目標は全体目標にとどめ、表3に示すように方法、評価を詳述している。

#### 3・3 中学校の「家庭科」

「家庭科」の新・旧教育課程の比較を表4に示す。

従来は「実業・家庭」科で、12教科のなかの1教科として男女の別なく、第1・2学年ではこの教科に含まれる「技術」「家庭」「技術・家庭」から1科目を選択必修とし、授業時数は第1学年では週3時間、第2学年では週4～6時間を配当していた。第3学年では職業系5科目の中に「家事」の科目が置かれていて1科目を選択し、授業時数は週4～6時間を配当していた。

今回の改訂ではこれを改め、男女共学で学ぶ必修教科として「技術・産業科」と「家庭科」の2教科に統合・整理した。家庭科の授業時数は第1学年週2時間、第2～3学年週1時間、統計4時間が充てられている。従って、履修時間数の減少に伴い表4に\*で示した内容が弱化或いは削減されている。

教科目標		実生活に必要な仕事の経験を通して、個人の資質を開発し、現在と将来の生活に対処できる基本的資質と態度を育成する。			
具体的目標		(1) 家庭生活に必要な基本的な仕事を選択して、合理的に計画、実行できる能力を育成する。	(2) 生活に関する簡単な仕事を経験させ、基本的な技能を習得させる。	(3) 日常生活にみられる消費形態と生活物資の流通を理解させ、生活資源を合理的に選択、活用、管理できる消費者として必要な知識・技能を習得させる。	(4) 職業に関心をもち、これを尊重して、自動、勤勉、協調の態度を育成する。
第 四 学 年	学年目標	○家庭での自分の位置を知り、自分が行う仕事を計画し、実践する能力を育成する。	○自分が行う仕事を合理的に処理できる技能を習得させる。	○家庭の収入の内容を、自分のこづかいと結び付けて理解させ、物の使い方、金銭の使い方を合理的に行い、節約、貯蓄する生活習慣を習得させる。	○仕事を実践し、仕事の喜びと関心をもたせる。
	内容	1) 生活の計画と管理 1. 家庭で行う自分の仕事 2. 仕事の計画と実行(食事、こづかいの計画) 3. 生活環境の整理・整頓(たんす、机の整理の方法)	2) 仕事の技能 1. 住環境の整え方(自分の部屋、持ち物の整理・整頓) 2. 紙による物作り(整理箱作り) 3. 衣服の基本的縫い方 4. 衣服の着方、整え方 5. 食品の取り扱い方と後始末の方法(果物、菓子、飲み物など) 6. 栽培・飼育(花畑、鳥、動物)	3) 消費と節約 1. 家庭の収入と支出 2. こづかいの使い方(記録、節約、貯蓄) 3. 合理的な食生活(栄養素、食品) 4. 合理的な衣生活(衣服の選び方、質素な衣服)	4) 仕事と職業の理解 1. 仕事の理解 2. 仕事の楽しみ
第 五 学 年	学年目標	○家庭の仕事を計画して実践する能力と態度を育成する。	○家庭の生活を経験させ、基礎的な技能を習得させる。	○生活に必要な物資を適正に購入し、効果的に使用、管理する能力と計画性のある消費者の態度を育成する。	○仕事と職業の重要性を理解させ、勤労を尊重する態度を育成する。
	内容	1) 生活の計画と管理 1. 家庭の仕事の手伝い 2. 仕事の計画(掃除、洗濯など) 3. 清潔、安全な生活(自分の体、自分の周辺) 4. 住生活の設計	2) 生活に関する技能 1. 家具による整理・整頓(家具の種類と働き、整理の工夫) 2. 木材による物作り(図面を見て簡単な工具による物作り) 3. 袋、エプロン作り(使う目的に合ったもの、材料の選び方、作り方) 4. 洗濯の仕方(ハンカチ・靴下・下着洗い) 5. 調理実習(用具・燃料の使い方、簡単な調理) 6. 家庭機器の使い方(使い方と手入れ) 7. 野菜づくり(トマト・ナスなどの種まき、移植の方法)	3) 消費と節約 1. 家庭の書類の保管、廃品の処理の仕方 2. 食品の選択と利用(用途に合う選択) 3. 木工品の選択と利用(用途に合う選択) 4. 被服の役割と選択 5. 家庭機器の選び方と利用	4) 仕事と職業の理解 1. 職業の重要性 2. 家族の職業
第 六 学 年	学年目標	○近所と協力し、仕事を計画し実践することを通して、協力する態度、快適な生活環境づくりの能力を育成する。	○生活に必要な用品を作る技能を習得させ、生産を尊重する態度を育成する。	○生活に必要な物資の生産、流通、購入の初歩的知識を理解させ、生産物を合理的に購入し、活用し、節約する態度を育成する。	○職業の世界を理解し、産業社会の変化に関心をもち、自分の適性を見だし、資質を開発する能力を育成する。
	内容	1) 生活の計画と管理 1. 近所との協力 2. 招待、会合の計画と実行 3. 環境保護(美しい環境づくり)	2) 生活の技能 1. 樹木の植え方 2. 金属・合成樹脂による物作り(金属・合成樹脂の特性と物作り) 3. 衣服のリフォーム 4. 調理実習(調理、配膳、食事作法) 5. 食物作物の生産 6. 水産物の養殖(魚の育て方、水産物の利用法) 7. コンピュータと生活(基本的操作)	3) 消費と節約 1. 生活物資の流通(販売方法) 2. 食品の選択と購入 3. 衣服の選択と購入 4. 金属材料、合成樹脂の選択と活用	4) 仕事と職業の理解 1. 職業と能力 2. 職業の適性と発見

韓国文教部告示「教育課程」より作成。

表2. 第六次教育課程 小学校「実科」の性格と目標および内容

性 格	<p>実科は、子どもたちが仕事の重要性を知って、実践的な学習活動を通じ生活を向上させようとする教科である。我々の日常生活は仕事の質に影響されるので、子どもたちに、仕事と人間との関係を理解させて、仕事をするための基礎技能を身につけさせ、さまざまな仕事を体験させることは、生活の向上はもちろん、未来への準備教育としても重要である。</p> <p>実科は、日常生活で要求される仕事に対する基本的内容を抽出して、子どもたちの発達水準に合うような内容を選択・組織して、いろいろな学習方法を通じて、多様な生活技能を習得するとの点で独特の領域を構築している。</p> <p>よって、実科は教科の性格にあるように、実践的な側面を強調して、「取扱い」「作る」「栽培及び飼育」「管理」の4領域で構成されている。</p> <p>実科では、勤勉を本質とした実践性及び、仕事の価値・尊重、仕事への態度を重要としている。これは、学習活動を通じて、働く喜びと成就感を感じ、この仕事を生活に適応させて、発展的に改善しようとする実践性が繰り返されることによって、勤労の価値を知り、他人の苦勞に感謝する人格が育てられるからである。従って、実科では、仕事の計画から実行までのすべての課程を通して、自ら仕事を選択して総括させる。このためには絶えず努力と協同が必要であることを知らせ、忍耐力を持ってその仕事を解決するように教育の機会を付与している。よって、この教科で学習するすべての内容は、学習の結果だけではなく過程も重視し、学習後、発展的に日常生活に適用されるようにしている。</p>				
	<p>日常生活に必要な仕事を体験させ、子どもの素質を啓発し、これからの実生活に対処できる基本的な能力と態度を育てる。</p> <p>ア. 基本的な工具・器具を取り扱えるようにし、日常生活に必要なものを作る能力をもたせる。</p> <p>イ. 生活環境をきれいに飾ったり、作ったりして、改善できる管理能力をもたせる。</p> <p>ウ. 仕事の体験を通じて、勤労の価値を理解させる。勤勉性と、協同する態度をもたせる。</p>				
内 容	領域 学年	取扱い	作る	栽培及び飼育	管理
	第三学年	(1) 工作機具取扱い (2) 茶菓用入れ物取扱い (3) 水栽培に必要な用具取扱い	(1) 紙で整理箱作り (2) いろいろな茶菓作り (3) 簡単な用品作り	(1) 水で野菜及び球根草花の栽培	(1) 服をたたむ、かける (2) 服装を端正にする (3) 整理箱を利用して整理する (4) 掃除、ゴミの分離処理
	第四学年	(1) 調理用機具、針仕事用具 (2) 電灯取り替え (3) 電気テスターの取扱い	(1) 果物準備(洗い、剥き切りなど)、及びお膳整え (2) 電線にプラグ連結 (3) 仕事(並縫い)で品物作り	(1) 箱や花壇で花の栽培 (2) 金魚を飼う	(1) 学用品を選び管理する (2) 小遣い出納簿を書く
	第五学年	(1) 針仕事用具、はんだごて、農具取扱い (2) 調理器具と延焼器具取扱い (3) computerの取扱い	(1) 電子KIT作り (2) ジャガイモ、卵などで食べ物作り (3) 針仕事(返し縫い、ボタン付け)で品物作り	(1) 箱や畑で野菜の栽培 (2) ウサギや鶏を飼う	(1) 食品選び (2) computerを管理する
	第六学年	(1) 木工具取扱い (2) Computerで文字書き (3) 木の手入れ・はさみの取扱い	(1) 木製品作り (2) 飯炊き	(1) 環境づくり (2) PETを飼う	(1) 部屋の平面図に家具の配置図を書く (2) 食べ物を保管する (3) 皿洗い及び盛りつけ

表3. 第六次教育課程 小学校「実科」の方法および評価

## 方法

- ア、指導計画の作成は、内容の特性と、季節・行事などとの関連性を考慮して、指導効果を高めるようにする。
- イ、地域性が強調される内容は、学校の実状や、地域条件によって選択し、その他の内容で構成して指導したり、見学・視察などで代替できる。
- ウ、時間計画は、学習の効果をあげるために必要な場合、連続して編成・運用でき、実習時間が不足な場合は学校裁量時間を活用できる。
- エ、学習内容は、できれば全般を通じて、労作活動と実習中心で指導して、学習した内容が、日常生活に継続的に活用できるようにし、男女の差異や、特定役割を強調しない。
- オ、実習の効果を高めるために、実習室と必要な施設・設備、及び器具・道具などを取り揃えるようにする。
- カ、実習の指導では、材料を合理的に選択・購入・活用して、誠実に協同する態度を育てる。
- キ、機械・器具の造作・管理・保管、熱源・燃料などの取扱いに留意し、特に安全教育に努力する。
- ク、食品調理実習は、調理に使用される食品の衛生に留意し、実習後の片づけまでよく指導する。
- ケ、現場学習・見学などを実施する場合は、事前に指導計画を立て、効果を上げる。
- コ、実習や仕事の随行に当たっては、途中で放棄しないで、最後まで参与する。
- サ、computer の指導に当たっては、学校の施設・条件を考慮して指導計画を立て、computer の指導時間を増やしたい時は、学校裁量時間を活用する。

## 評価

- ア、目標に準拠して評価するが、理解力・実技能力・実習活動に対する態度などを評価する。
- イ、実習の評価は仕事の結果だけでなく、計画と過程に対する継続的な評価ができるようにする。
- ウ、労作活動及び実習の評価は、学習した内容が全般的に評価されるように、多様な評価方法を適用して行う。
- エ、自己評価においては、子どもたちが十分に理解できるように、段階別に評価基準を明確に提示して評価する。
- オ、「取扱い」「作る」「栽培及び飼育」「管理」の各領域の技能に対する評価はできれば実技評価方法を適用し、実技の比率が全体評価に60%以上反映されるようにする。
- カ、実技能力に対する評価では、次の事項に重点を置く。
- (1) 「取扱い」領域では、道具・器具などを正しく取り扱ったり、活用する能力を評価すること重点を置く。
  - (2) 「作る」領域では、計画段階から完成するまでのすべての過程を段階別に評価に反映する。
  - (3) 「栽培及び飼育」領域では、可能な限り個人別に履修したことを評価する。そうでない場合は、協同して随行しながら、すべての過程を経験させ、各段階別に評価基準を提示して行う。
  - (4) 「管理」領域では、仕事の計画・実行・結果・生活への適用などに重点を置く。

表4. 中学校「家庭科」の新・旧教育課程比較

区 分	第 5 次	第 6 次	備 考
教科編成 及び履修 単位	実業, 家庭教科 技術 家庭 技術・家庭 1, 2 学年 3, 4-6 時間  農 業 工 業 商 業 水産業 家 事 1, 2 学年 3, 4-6 時間	家庭科 1, 2, 3 学年 2, 1, 1 時間 (総 4 時間) 技術・産業科 1, 2, 3 学年 1, 2, 2 時 間 (総 5 時間)	○家庭科に家庭, 家事統合  ○技術・産業科に技術, 農, 工, 商, 水産統合 ○家庭科, 技術・産業科をすべての 学生が履修 (男女共学必修) ○8 科目が 2 科目に ○履修時間は総 11~15 時間が 9 時間 に縮小
教育課程 提示様式	1. 目標 2. 内容 3. 指導及び評価上の留意点	1. 性格 2. 目標 3. 内容 4. 方法 5. 評価	
性 格		○家庭科の性格を包括的に提示	○新設
目 標	○科目の目標の学年目標で二 元的に提示 ・家族と社会の一員として 協同する生活態度 ・家庭生活に必要な基礎的 な知識・技能習得, 日常 生活の創意的営為 ・進路・職業理解, 探索	○教科目標だけ提示 ・自分と家庭生活の理解 ・家庭生活に必要な基礎的な知識 ・技能習得, 日常生活に実践的に活用 ・家庭生活に自主的, 協同的に参与	○家庭科の本質強調, 目標を具体的 にして一元的に提示
内 容	○家庭生活 (1) ○家族員の成長と発達 (2)	○私の家庭生活 (1) ○家族に対する理解 (3)	○内容の履修学年調整 ○自己理解から家族理解
	○消費生活と資源の活用 (1)	○家庭資源の活用と管理 (1) ○消費者の意思決定 (2)	○資源活用と消費生活問題内容強化 2 個学年で履修するようにする ○環境問題重視 ○技術産業で履修 * computer 内容削除
	○我々の食生活 (1) ○食生活の向上 (2) ○食生活 (3)	○青少年期の栄養管理 (1) ○食品の選択と利用 (2) ○食事管理 (3) * 団体給食, 特殊食, 食品産業内容削除	○内容の履修学年調整 ○適用中心の組織 ○環境問題, 資源活用問題考慮 ○授業時数減縮と他教科履修考慮
	○青少年期の衣生活 (1) ○衣生活管理 (2) ○衣生活 (3) ○手芸 (4)	○衣服に対する理解 (1) ○衣服の購買 (2) * 衣服の材料内容縮小 表現事項理解で衣服選択 問題解決に主眼点を置く * 服作り, 繕手, 編物など実習内容削除 * 家庭科関連内容削除	○内容の履修学年調整 ○適用中心の組織  ○授業時数減縮と男女共通履修考慮 ○技術産業科で履修
	○家庭の生活環境 (1)	○住居空間の活用 (3) * 空間計画, 設備部分弱化	○内容の履修学年調整 ○適用中心の組織
	○職業と私の進路	* 削除	技術産業科で履修
方 法	○「指導及び評価上の留意点」 から「指導」で指導方法及 び留意事項提示 ・実験実習を主として教育 資料活用など方法問題解 決力の育成重視など	○方法を独立項目として 14 項目 ・生活周辺素材活用, 活動中心, 事例中 心の体験学習強調 ・環境保存, 安全教育など 関連領域で学習構造など	○「方法」と「計画」を別個項目で 独立 ○生活周辺素材で体験を通じる学習 構造  ○現代社会の要求事項強調
評 価	○「指導及び評価上の留意点」 から「評価」で評価及び留 意事項提示 ・実技評価基準作成 一学生の自己評価並行など	○「評価」を独立項目として 6 項目と提示 ・多様な評価方法活用 ・評価計画と基準の事前告知, 過程と成 果を随時評価 一指導時間単位制 実技評価実施など	○評価の客観性補強  ○過程重視, 評価の妥富性補強

( ) 内の数字は履修学年表示である

### 3・4 高等学校の「実業・家庭科」

従来は一般系、実業系・その他の系の別に編成されており、教科目はいずれも普通教科目群と専門教科目群に分かれていた。普通教科目群は13教科編成で、両系とも共通必修と選択の教科があった。「実業・家庭科」は選択教科目として位置づけられていた。

改訂により、「実業・家庭科」には技術（4単位）、家庭（4単位）、農業（3単位）、工業（3単位）、商業（3単位）、水産（3単位）、家事（3単位）、情報産業（3単位）、進路・職業（3単位）の9科目が設けられ、普通科の生徒は、技術か家庭の内1科目および他の7科目の内1科目、計7単位を履修し、専門学科の生徒は、技術か家庭のどちらか1科目、4単位を履修することとなった。旧教育課程を表5と表6に、新教育課程を表7と表8に示す。

表5. 第五次教育課程 高等学校「実業・家庭」科「家庭」の目標と内容

教科目標 (実業・家庭)	産業と技術および家庭生活に関する知識と技能を習得させ、進路を正しく選択し、変化する高度産業社会に適応できる能力と態度を育成する。		
具体的目標 (実業・家庭)	(1) 産業社会に必要な知識と技能を習得させ、産業の理解、発展の能力と態度を育成する。 (2) 家庭の本質の理解と家庭生活に必要な知識と技能を習得させ、生活の質向上の能力と態度を育成する。 (3) 産業と人間の生活、仕事と職業の関係に関する知識を習得させ、自己の能力、適性に合う進路が選択できる能力を育成する。		
科目目標 (家庭)	① 家庭の意義、人間の発達、家族関係を理解させ、家族の福祉と社会の発展に尽くす能力を育成する。	② 衣・食・住および消費生活に必要な知識・技能を習得させ、創造的生活を営む能力と態度を育成する。	③ 家庭生活と関連する分野の職業を理解させ、自己の進路を選択できる能力を育成する。
内 容	1) 家族の本質 ・ 家族の定義・機能・形態、家庭生活の変遷 2) 家族の発達と家族関係 ・ 家族の形成・役割、家庭生活周期と家族関係、家族の福祉 3) 家庭管理 ・ 家庭管理の意義・過程、家庭資源と環境 4) 家庭経済と消費生活 ・ 家庭経済の変動と対策、消費者の意思決定	1) 人体と栄養 2) 食品と調理 3) 食生活の管理 ・ 食糧資源と環境、食事の計画、調理と配膳 4) 人体と衣服 5) 衣服デザインと構成 6) 衣生活の管理 7) 住宅設計と施工 ・ 住生活の意義、各室の機能と住宅設計（設備）、建築資材の選択 8) 住宅の選択と管理 ・ 住宅型の種類と選択、地域社会の特性と法規、住宅の市場と情報の活用 9) 幼児の発達 ・ 幼児観の変遷、幼児の社会化と家庭、発達の原理・特徴 10) 出産と幼児 ・ 父母の意味、妊娠・分娩、疾病予防と対策、発達の異常	1) 職業と進路 ・ 職業の意義、家庭と関連する職業の世界

韓国文教部告示「教育課程」より作成。

表6. 第五次教育課程 高等学校「家事・実業に関する教科」(選択)の履修領域と科目(37科目)

領域	科目
1 幼児に関する領域	幼児の発達, 幼児教育, 幼児の遊び, 幼児福祉, 幼児の健康と栄養, 幼児の生活指導, 幼児の芸術指導(7科目)
2 衣服に関する領域	衣服の製図, 衣服のデザイン, 衣服の構成基礎, 衣服の材料, 韓国の衣服, 西洋の衣服, 編み物, 刺しゅう, デザインと色彩, 手芸, 韓国模様, 手刺しゅう, 機械刺しゅう(13科目)
3 食物に関する領域	食生活の管理, 食品衛生, 基礎調理, 大量調理, 韓国料理, 外国料理, 特殊栄養, 食品の貯蔵・加工(8科目)
4 観光, ホテルに関する領域	観光事業, 観光サービス, 観光法規, 観光英語, 観光地理, ホテル実務(6科目)
5 電子計算一般	
6 室内装飾	
7 総合(幼児教育, 衣服, 調理, 刺しゅう, 観光など)	

韓国文教部告示「教育課程」より作成。

表7. 第六次教育課程 高等学校「家庭」の性格・目標及び内容

性 格	<p>‘家庭’科目は家庭の本質を理解して, 生活の質を向上させられる能力と態度を育て, 個人と家庭の安寧と福祉を増進させて, 究極的には社会の安寧と発展に寄与できるようにするための科目である。</p> <p>高等学校‘家庭’は中学校家庭科教育を質として男女区分しないで選択して履修できる科目として家庭経営の次元から家族の問題解決と生活管理に必要な能力と態度を育てるのに目標を置いてある。これは円満な家庭生活の維持及び家庭の仕事の分担と協力を積極的に参与するようにする中学校‘家庭’とはその範囲と水準で差異がある。</p> <p>内容は‘人間発達と家族関係’, ‘家庭資源の管理と消費生活’, ‘食生活’, ‘衣生活’, ‘住生活’などの領域で構成されたり, これの内容はすべての関連知識や原理を統合してこれを家庭生活に適用できるようにする要素で構成される。</p> <p>教授学習では, 実生活での有用性が重視される科目内容に留意して, 単純な知識と技能の習得よりこれを日常生活に実践的に活用できるようにすることに主眼点を置く。</p>		
	<p>ア. 家族関係及び人間発達に関する知識と技術を習得するようにして, 家庭生活を円滑にできるようにする。</p> <p>イ. 衣食住及び消費生活の管理に関する知識と技術を習得するようにして, 家庭管理を合理的にできるようにする。</p> <p>ウ. 家庭の安寧と福祉増進に責任感を持って自主的に参与して, これを基盤として社会の安寧と発展に寄与できるようにする。</p>		
内 容	領 域		
	人間発達と家族関係	家族関係と生活設計	○家族の構造と役割変化    ○生活設計 ○家庭福祉, 家族法
		児童発達と親の役割	○親なりの意味    ○妊娠と出産, 母子健康 ○児童発達, 手塩にかけ
	家庭資源の管理と消費生活	家庭生活の管理と消費生活	○家族生活周期による資源管理    ○家庭管理技術 ○家計の計画と管理    ○消費者役割と保護
	食 生 活	食 生 活 管 理	○家族の健康と栄養 ○食品の特性, 調理と食品成分の変化 ○食品衛生, 食品の保存    ○食文化の形成と変化
	衣 生 活	衣 生 活 管 理	○衣服と個人との関係 ○服地の繊維, 組織, 加工と衣服の性能 ○衣類の洗濯と保管    ○簡単な衣服の制作
	住 生 活	住居の計画と管理	○住居の選択    ○住居空間の計画 ○室内 design    ○住宅の維持管理, 住宅法規



表 8. 第六次教育課程 高等学校「家事」の性格・目標及び内容

性 格	家事科目は家庭生活に必要な実務技能を習得するようにして、家庭及び関連産業に適用できるようにするための科目である。 ‘家事’科目は家事実務に関する知識と技能を習得してこれを日常生活に適用できるようにする点では‘家庭’科目とその脈を一緒にするが、習得した知識と技能を職業生活に適用できるようにする点では‘家庭’科目と構別される。 内容は中学校と高等学校家庭科との関連性を考慮して、‘家事’科目の基礎的な職業教育性格を強調して、‘韓国食べ物’、‘外国食べ物’、‘韓国被服’、‘西洋被服’、‘手編物’などで構成している。 教授・学習では実習中心の学習を強調し、実生活での有用性が重視される科目性格に留意して単純な知識と技能の習得よりこれを家庭生活が関連産業に創意的に活用できるようにするのに主眼点を置いている。	
	目 標 ア. 食べ物、被服、手編物に関する知識と技能を習得するようにして、家庭生活及び関連産業に適用できるようにする。 イ. 家事実務は関連がある進路と職業の世界を理解するようにして、自分の適性と能力に当たる進路決定に役に立つようにする。 ウ. 制作の経験を通じて成就感と仕事の価値を感じるようにして、産業発展に寄与しようとする態度を持つようにする。	
内 容	領 域	
	韓国食べ物	○韓国調理の基礎    ○韓国食べ物の調理    ○お膳の整えと接待
	外国食べ物	○西洋食べ物    ○中国食べ物    ○日本食べ物
	韓 国 衣 服	○韓国衣服構成の基礎    ○部分針仕事と装飾針仕事、韓国繻の基礎 ○韓国衣服の制作
	西 洋 衣 服	○西洋衣服構成の基礎    ○部分針仕事と装飾針仕事、西洋繻の基礎 ○西洋衣服の制作
	手 編 物	○手編物制作の基礎    ○竹針と銅針の基礎結び    ○手編物の制作
	進路と職業	○職業倫理    ○家事実務と関連がある進路と職業

#### 4. おわりに

——韓国教育課程改訂の概要及び家庭科教育改革の方向——

韓国では第五次教育課程が1990年度から実施されていたが、1995年度から第六次教育課程への移行が開始されている。

従来の教育課程における家庭科教育は、小学校の「実科」、中・高等学校の「実業・家庭科」の教科がこれに該当し、学校教育の各段階に教育の機会が位置づけられていた。小学校では第4～6学年に設置されて授業時数は各学年週2時間であり、中学校では選択必修で、「実業・家庭」科に含まれる技術、家庭、技術・家庭、農業、工業、商業、水産、家事の各科目の中から数科目を履修する措置がとられていた。高等学校では普通教科の13教科の一つとなっていて、専門教科では、「家事・実業に関する教科」として設置されていた。

新教育課程における家庭科教育は、小学校の「実科」、中学校の「家庭科」、高等学校の「実業・家庭科」の教科がこれに該当し、学校教育の各段階に教育の機会が位置づけられていることは変わらないが、小学校の「実科」は第3～6学年に設けられ、各学年週1時間が充てられた。中学校では男女共学で学ぶ必修教科として「技術・産業科」と「家庭科」との2教科に統合・整理され、「技術・産業科」には、第1学年週1時間、第2～3学年週2時間、「家庭科」には、第1学年週1時間、第2～3学年週2時間が充てられた。高等学校では「実業・家庭科」に技術(4単位)、家庭(4単位)、農業(3単位)、工業(3単位)、商業(3単位)、水産(3単位)、家事(3単位)、情報産業(3単位)、進路・職業(3単位)の9科目が設けられた。普通科の生徒は、技術か家庭の内1科目および他の7科目の内1科目、計7単位を履修し、専門学科の生徒は、技術か家庭のどちらか1科目、4単位を履修することとなった。

このようにして韓国では、新教育課程によって、男女で学ぶ普通教育としての家庭科教育が、「実科」―「家庭科」―「実業・家庭科」というかたちで初等・中等教育を一貫して樹立され、各学校段階ごとの教科構造や配当時数などの点で示唆的である。新教育課程では小学校、中学校、高等学校ともに家庭科の履修時間が減少し、そのために内容は弱化或いは削減されているが、小学校で1年低学年から実科の学習が始まったことに意義があり、中学校で家庭科が男子にも必修となって男女がともに学ぶ家庭科を実施に移したことが最も評価される場所であって、家庭科教育改革の行方を示したと言えよう。中学校は技術・家庭科で4領域を共学必修の現状である日本が今後の方向を指向するにあたって、今最も注目するところである。高等学校は技術・家庭のうちから1科目を履修することであることから、男子にも家庭を履修する門戸が開かれてはいるものの、実際には男子は技術を女子は家庭を履修する可能性が大きいのではなかろうかと考えられる。実施後の履修状況結果が待たれるところである。

韓国語の第六次教育課程及びその日本語訳は、鹿大美術科留学生 金 黄起先生の厚意によるものであることを付記して深謝申し上げます。

#### 引用文献

- 1) 中間美砂子；国際的視野から日本の家庭科を考える，教大協全国家庭科部門第9回大会シンポジウム(1995)
- 2) 実業・家庭科を分離し技術・産業科と家庭科の2教科とした韓国，教大協全国技術教育部門常任運営委員会資料(1994)
- 3) 韓国文教部告示；教育課程，韓国文教部(1992)
- 4) 関志比子；国際理解教育と教育実践 技術科家庭科教育における国際理解教育―韓国，エムティー出版(1994)